

アンゴラで看護 全力尽くしたい

AMDA派遣の2人

AMDA（アジア医師連絡協議会）がアフリカのアンゴラで取り組む難民救援プロジェクトで現地へ派遣される看護婦旅田香住さん（三七）（大阪府東大阪市）と三浦美樹さん（三七）（神奈川県横須賀市）が三日、岡山市の本部で記者会見。「ポルトガル語を早く覚え、看

護活動に全力を尽くしたい」と抱負を述べた。

旅田さんら二人は十日、関西、成田両国際空港から現地へ向かう。ザイル国境に近いウィジ州のサンザ・ポンボ市の病院を中心に活動。旅田さんは一年、三浦さんは半年の予定。今月中旬には、AMDAネパール支部の医師二人も現地入りして態勢を強化、バンゲラデシ支部からの医師派遣も検討している。

AMDAの近藤祐次・事務局長は「ザイルに二十万人のアンゴラ難民がいると言われているが、地雷で帰還は思うように進んでいない。幼児性の下痢やマラリア、熱帯性の眠り病、結核患者が多く、病院は壊れたベッド五十床を確保で

きる程度」と状況を説明した。